

## 新生児期栄養法別による以後の発育発達の調査

研究協力者

(聖マリア病院) 橋本武夫

### ① ハイリスク産科における母乳栄養の試み

前回、ハイリスク妊婦から生まれるハイリスク新生児にこそ母乳栄養が必要であるという考えのもとに、救急産科において完全母乳栄養を試み、それが可能であった。(表)

総数	母乳		混	合	人	工
	母乳のみ	母乳+糖				
209	190	15	1			3

(98.1%)

(表) 救急産科における退院時栄養方法

混合および人工栄養の4名は、母親の心臓病、結核、精神病、分泌不良(巨大児)であった。

1ヶ月、3ヶ月後の母乳栄養もきわめて高率に保たれていることがわかった。すなわち生後1ヶ月では母乳75.5%、混合20.0%人工4.5%、生後3ヶ月では母乳53.6%混合

26.4%、人工20.0%であった。また

生後1ヶ月における経産婦の場合、上の児の栄養方法が、母乳、混合、人工それぞれ23、13、16、であったのが、今度の子では45、13、4と、前回人工栄養であってもあきらめずに努力すれば高率に母乳栄養が可能であることがわかった。

すなわち、救急産科でさえ完全母乳栄養は可能であり、しかもそれが3ヶ月後でも高率に保たれていた。また経産婦において前回人工栄養であったものも、努力すれば次の子の場合母乳栄養が高率に増加した。

### ② 地域における母乳栄養と死亡率の検討。

当院外来に年間80名の遅延性黄疸児(生後2週間以後)の紹介があり、そのうち33名がある一地域からのもので他地域にくらべ非常に高率であった。またその地域の乳児死亡率も出生972に対し3.1と非常に低い死亡率であった。

我々は、その地域に保健活動、母乳栄養を強く推進されている開業小児科医がおられるのを知り、死亡率と母乳栄養、保健活動などの関係を調査した。

調査方法：我々の地域から、乳児死亡率のことなる地域、(朝倉郡1.5 浮羽郡3.1 久留米市9.4 筑紫郡11.4)をえらび出し保健所における生後3ヶ月の乳児健診時に各地域の栄養法を調査した。

結果は(表)のごとく乳児死亡率のよい浮羽、朝倉はやや母乳率は高かった。

さらに保健活動の一環として、母親がどれだけ保育に関心をもっているかをみるために母子手帖の記入率（利用度）を同時に調査した。その結果、朝倉45%、浮羽45%、久留米51%、筑紫65%の記入率であった。すなわち死亡率の高い地域では、予想外に母乳は保育に関心をもって母子手帖によく記入していた。ちょうど母乳率と反対の結果が出たように思われる。極端に言えば、筑紫群では、母親の保育に対する関心はつよいが、母乳栄養はすくなく死亡率が高い。浮羽群では母親の関心度は低いが母乳率が高いため死亡率が低いともいえるが、当然のことながらこれは断定出来ない。前者はやや町で後者は村などという環境の差もあろうし、浮羽群の場合はまだ核家族化されていないことや他の色々な因子が考えられる。しかし地域の死亡率に対する1つの因子として傾向だけでもうかがえるような感じである。今後なお検討が必要である。

乳児死亡率		浮羽郡 (31)	朝倉市 (15)	久留米市 (94)	筑紫郡 (114)
生後1週	母乳	56.2	49.1	40.3	42.4
	混合	20.5	26.4	36.1	34.9
	人工	23.1	24.5	23.6	22.7
生後1ヶ月	母乳	49.3	43.1	33.3	39.4
	混合	23.9	23.5	36.1	27.3
	人工	26.8	33.3	30.6	33.3
生後3ヶ月	母乳	40.8	33.3	30.6	28.8
	混合	23.9	17.6	34.7	23.7
	人工	35.2	49.0	34.7	45.5

(表) 各地域における栄養法の推移

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

### ハイリスク産科における母乳栄養の試み

前回,ハイリスク妊婦から生まれるハイリスク新生児にこそ母乳栄養が必要であるという考えのもとに,救急産科において完全母乳栄養を試み,それが可能であった。(表)